

PatentfieldおよびPatentfield AIR:機能総覧、技術的基盤、および戦略的知財活用に関する包括的調査レポート

Gemini 3 pro

エグゼクティブサマリー

本レポートは、AI特許総合検索・分析プラットフォーム「Patentfield」およびその拡張機能である生成AIモジュール「Patentfield AIR」について、その機能的詳細、技術的アーキテクチャ、料金体系、競合優位性、および実務における戦略的活用方法を網羅的に調査・分析したものである。

現代の企業経営において、知的財産(IP)情報は法的な権利保護の対象としてだけでなく、経営戦略や事業戦略を決定するための重要な「情勢判断データ」として位置づけられている。いわゆる「IPランズケープ(IPL)」の概念が普及する中で、特許検索ツールには、単なる公報の検索機能に留まらず、膨大なデータから意味あるインサイト(洞察)を抽出し、可視化し、未来を予測する能力が求められている。

Patentfieldは、これらの要求に応えるべく、従来のキーワード検索(プロフェッショナル検索)と、最先端のAI技術(セマンティック検索、分類予測、生成AI)を単一のプラットフォーム上で融合させた「第4世代」の特許分析ツールとして市場での地位を確立している。特に、近年実装された「Patentfield AIR」は、大規模言語モデル(LLM)を特許実務のワークフローに直接統合し、最大1万件規模の文献一括査読や、技術メモからの明細書ドラフト作成といった、従来は人手に依存していた高度な知的作業の自動化を実現している¹。

本稿では、これらの機能がいかにして知財専門家の業務効率を劇的に向上させるか、そして同時に、研究開発(R&D)部門や経営層といった「非知財専門家」による特許情報の活用(知財の民主化)を促進するかについて、詳細な機能分析とユースケースを通じて論じる。また、各機能の背後にある技術的メカニズム(ベクトル検索のアルゴリズムやプロンプトエンジニアリング特許など)にも踏み込み、ツールの信頼性と将来性を評価する。

第1章: Patentfieldプラットフォームの基本概念とアーキテクチャ

1.1 「4つのコア機能」による統合的アプローチの重要性

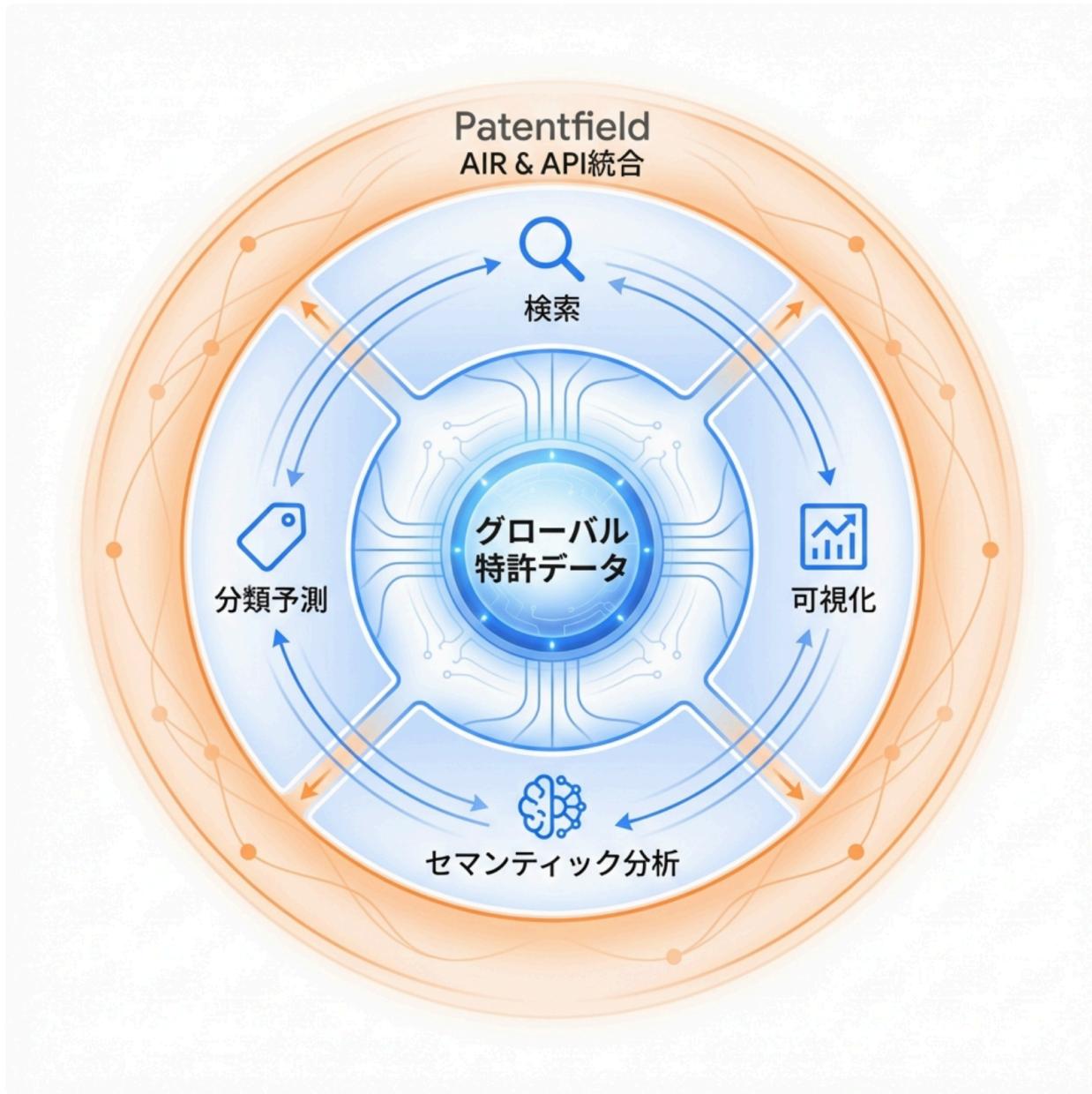
Patentfieldの設計思想における最大の特徴は、特許調査・分析に必要な要素を分断させることなく、4つの主要機能をシームレスに結合させた「ワンストップ・プラットフォーム」である点にある³。従

来の知財業務環境では、検索には検索専用のデータベース、可視化にはパテントマップ作成ソフト、AI解析には別のAIツールといった具合に、複数のツールを使い分ける必要があり、データのインポート・エクスポートに伴う手間や情報の欠落が課題となっていた。Patentfieldはこの課題に対し、以下の4機能を同一のデータベース上で動作させることで解決を図っている。

1. **プロフェッショナル検索 (Professional Search):** 知財実務家が求める精密な検索式(検索クエリ)の構築、論理演算、近傍検索、ノイズ除去などを可能にする基盤機能である。これは、AIがいかに進化しようとも、法的判断の基礎となる「漏れのない母集団作成」において不可欠な要素である³。
2. **データ可視化 (Data Visualization):** 検索結果として得られた特許集合を、即座にグラフやマップとして視覚化する機能である。Patentfieldでは、検索操作と可視化操作が一体化しており、検索条件を変更すればグラフもリアルタイムに再描画される。これにより、分析者は「検索→仮説検証→条件修正」のサイクルを高速に回すことができる⁵。
3. **AIセマンティック検索 (AI Semantic Search):** 従来のキーワード一致による検索ではなく、文章の意味内容(文脈)に基づいた検索機能である。特許特有の難解な表現や、類義語の多様性(例:「自動車」と「車両」)をAIが吸収し、キーワードを知らないても関連特許を発見することを可能にする⁷。
4. **AI分類予測 (AI Classification Prediction):** 機械学習(教師あり学習)を用いて、検索結果の特許に対して自動的に分類(タグ)を付与し、重要度をスコアリングする機能である。数千件、数万件に及ぶ検索結果を目視で全件査読することは現実的ではない現代において、AIによるスクリーニング支援は必須の機能となっている¹。

これらの機能は独立して存在するのではなく、相互にデータをやり取りし、補完し合う関係にある。例えば、セマンティック検索で広めに収集した母集団に対し、プロフェッショナル検索のフィルタリング機能でノイズを除去し、その結果を可視化機能でマップ化して俯瞰し、さらにAI分類予測で重要特許を抽出するといった一連の流れが、画面遷移やデータ移行なしに行えるのである。

Patentfield プラットフォーム統合アーキテクチャ



検索、可視化、セマンティック分析、分類予測の4大機能に加え、生成AI層（AIR）が全体を包摂し、高度な自動化を実現している。

1.2 グローバルデータベースの網羅性と更新性

特許調査においてデータベースの収録範囲は信頼性の根幹をなす。Patentfieldは、日本(JP)、米国(US)、欧州(EP)、中国(CN)、韓国(KR)、台湾(TW)、およびPCT国際出願(WO)といった主要国の特許データを収録している⁴。これにより、企業のグローバル展開に合わせた世界規模での技術

動向調査や侵害予防調査が可能となる。

特に注目すべき点は「リアルタイム更新」である⁵。特許情報は毎週特定の日に各国特許庁から発行されるが、このデータが検索システムに反映されるまでのタイムラグ(収録遅延)は、侵害リスクの見落としに直結する。Patentfieldは高速なデータパイプラインにより、発行された公報データを迅速に検索対象として利用可能にしている。また、書誌情報だけでなく、審査・審判の経過情報(リーガルステータス)も収録されており、特許が現在有効か、権利化の過程でどのような拒絶理由を受けたかといった情報も分析対象となる⁴。

1.3 ユーザー層の拡張と「知財の民主化」

従来、特許検索データベースは操作が複雑であり、特定の検索コマンドを熟知した「特許センター」や知財部員のみが利用する専門ツールであった。しかし、Patentfieldはこの障壁を取り除くことを設計思想の一つとしている。

AIセマンティック検索機能の搭載により、ユーザーは厳密な検索式を組み立てる必要がなく、開発中の技術メモや企画書などの自然文を入力するだけで、関連する特許を探し出すことができる⁶。これにより、研究開発の現場にいるエンジニアや、新規事業を企画するマーケティング担当者など、知財の専門知識を持たない層までもが、自ら特許情報を探索し、開発のヒントや競合情報を得ることが可能となった。この「知財の民主化」は、組織全体のイノベーション能力を底上げする効果をもたらす¹¹。

第2章: 検索機能の詳細分析 - 従来型論理検索とAI検索の融合

特許調査には、目的(侵害調査、無効資料調査、動向調査)に応じて最適なアプローチが異なる。Patentfieldは、漏れのない網羅性が求められる場面での「プロフェッショナル検索」と、未知の技術や概念探索が求められる場面での「AI検索」を融合させている。

2.1 プロフェッショナル検索の実力と仕様

プロフェッショナル検索は、知財実務家が最も頻繁に使用するモードであり、精密な集合制御が可能である。

- **論理演算とコマンド:** 一般的なブーリアン演算(AND, OR, NOT)に加え、入れ子構造(括弧の使用)や複雑な論理式の構築に対応している。例えば、「(人工知能 OR AI) AND (自動車 OR 車両) NOT 玩具」といったクエリを直感的に、あるいはコマンドライン形式で入力できる⁴。
- **近傍検索 (Proximity Search):** 複数のキーワードが特定の距離(文字数や単語数)以内に存在する場合のみヒットさせる機能である。Patentfieldでは *N コマンドを使用し、例えば *N5 "人工知能 ニューラルネット" と記述することで、両者が5文字以内に近接して出現する文献を検索できる。これは、単に両方の単語が含まれているだけでなく、文脈的に強い関連性がある文献を絞り込む際に極めて有効である⁴。

- フィールド指定検索: 全文検索だけでなく、特定の項目(出願人、発明者、IPC、請求項、要約など)を指定した検索が可能である。100種類以上の検索項目が用意されており、審査官キーワードや引用文献など、細かな属性に基づいたフィルタリングが行える⁴。
- 番号・リスト検索: 他の調査システムで抽出した特許リストや、社内で管理している重要特許リストを、公報番号(出願番号、公開番号、登録番号)の一括入力によってPatentfield上に展開する機能である。これにより、既存のリストに対してPatentfieldのAI分析や可視化機能を適用するといった連携利用が容易になる¹。
- ノイズ除去UI: 検索結果一覧画面において、表示された特許の出願人や分類(IPC/FI)をクリックするだけで、その属性を持つ特許を検索条件から「除外(NOT条件)」したり、「絞り込み(AND条件)」したりできる直感的なインターフェースを備えている。これにより、検索結果を見ながらインタラクティブにノイズを除去し、母集団の純度を高めていく作業(スクリーニング)が効率化される⁴。

2.2 AIセマンティック検索のアルゴリズムと「Unknown Unknowns」の発見

PatentfieldのAIセマンティック検索は、Facebook AI Research(現Meta AI)が開発した自然言語処理ライブラリ fastText をベースにした分散表現技術を採用している¹²。

- ベクトル空間モデル: この技術では、特許公報に含まれる単語や文章を、数百次元のベクトル空間上の点として数値化(ベクトル化)する。AIは、事前に数千万件規模の特許文献を学習しており、単語の意味的な近さを理解している。例えば、「自動車」と「クルマ」は文字としては異なるが、ベクトル空間上では非常に近い位置に配置される。同様に、「ディスプレイ」と「表示装置」も近接する。
- 類似概念検索: ユーザーが検索したい技術内容を文章(テキスト)で入力すると、システムはその文章をベクトル化し、空間上で距離が近い特許公報を瞬時に抽出する。これにより、キーワードが一切一致していないても、技術的な概念や文脈が似ている特許を発見することができる⁷。これは、調査担当者が想定していなかったキーワードや分類で出願されている特許、いわゆる「Unknown Unknowns(未知の未知)」を発見する上で決定的な役割を果たす。
- 検索対象の最適化: セマンティック検索は、タイトル、要約、請求の範囲、明細書全体といった特定のセクションを対象に実行できるほか、審査官キーワードや、「課題」「解決手段」「効果」といった日本特許特有の構造化データに対しても適用可能である⁴。これにより、「課題が似ている特許」や「解決手段が似ている特許」といった視点での類似検索が可能となる。
- ハイブリッド検索: AI検索の弱点として、解釈のブラックボックス化や過度なノイズの混入が挙げられることがある。Patentfieldでは、これを補うために「ハイブリッド検索」が可能である。すなわち、まずはプロフェッショナル検索で特定の技術分類(IPC)や出願期間で母集団を絞り込み、その中のみAIセマンティック検索を実行する、あるいは逆にAI検索の結果をキーワードでフィルタリングするといった運用である¹³。これにより、AIの発見力と論理検索の制御性を両立させている。

2.3 類似画像検索

特許や意匠の世界では、言葉で表現しにくい形状や構造が権利の核心となる場合がある。Patentfieldは、画像データを入力として、類似した図面を持つ公報を検索する「類似画像検索」機能を搭載している⁴。

ユーザーは手持ちの図面画像や写真(JPEG, PNG等)をアップロードするだけで、データベース内の数億枚に及ぶ図面(特許の実施例図や意匠図面)の中から、形状特徴が類似したものをランキング表示できる。これは、意匠権の侵害調査や、機械部品・構造部材の特許調査において、テキスト検索では到達できない精度を実現する。

2.4 特定エンティティの検索・分析(出願人、発明者、代理人)

Patentfieldは技術文献の検索だけでなく、知財活動を行う「プレイヤー」の検索・分析にも特化した機能を有している。

- 出願人・権利者検索: 企業名を指定して、その企業の出願推移、共同出願人ネットワーク、保有特許の技術構成などを分析できる¹。
- 発明者検索: 特定の研究者や発明者を追跡し、その人物が過去にどのような技術開発に関わり、現在はどの企業に所属しているか、あるいは誰と共同研究しているかといった「人」起点の分析が可能である¹。これは、キーパーソンの引き抜き(ヘッドハンティング)や共同研究パートナーの選定に利用される。
- 特許事務所・代理人検索: 特許の出願代理人(弁理士や特許事務所)を検索し、その事務所が得意とする技術分野や、特定の企業との関係性(クライアントシェア)、登録査定率などのパフォーマンス指標を分析できる¹。これは、企業が依頼先の特許事務所を選定する際や、競合他社がどの事務所を使っているかを調査する際に有用である。

第3章: データ可視化とパテントマップ - 瞬時のインサイト抽出

検索によって得られた特許集合(母集団)は、そのままでは単なるリストに過ぎない。Patentfieldの「データ可視化」機能は、このリストを即座に意味のある情報(インサイト)へと変換する。

3.1 プリセットチャートによる多角的分析

Patentfieldには、知財分析の現場で頻繁に使用されるパテントマップのノウハウが凝縮された、13種類以上のプリセットチャートが標準搭載されている⁶。ユーザーは検索結果画面からこれらを選択するだけで、複雑な設定なしに高度な分析図を表示できる。

分析目的に応じたパテントマップ活用ガイド

マップタイプ	主な分析目的	得られるインサイト（問い合わせ）
ランキングマップ (Ranking Map)	プレーヤーの特定・競合比較	Q. 市場の支配者（ドミナントプレーヤー）は誰か？
時系列マップ (Time Series Map)	技術トレンド・推移分析	Q. その技術は成長期にあるか、それとも縮小・衰退しているか？
マトリクスマップ (Matrix Map)	ポートフォリオ・ギャップ分析	Q. 競合が進出していない空白領域（ホワイトスペース）はどこか？
サイテーションマップ (Citation Map)	技術の流れ・影響力分析	Q. 技術の源流となる基本特許はどれか？

Patentfieldには13種類のプリセットチャートに加え、自由に軸を設定できるクロス集計機能が搭載されており、多角的な分析が可能である。

Data sources: [MPIP](#), [Nakatani PE Office](#), [e-VORT](#)

- **ランキングマップ:** 出願件数の多い企業、発明者、特許分類などをランキング形式で表示する。これにより、その技術分野における主要プレイヤー（ドミナント・プレイヤー）を瞬時に特定できる¹⁵。
- **推移マップ（時系列マップ）:** 出願件数や登録件数の年次推移を可視化する。技術が黎明期にあるのか、成長期か、あるいは成熟・衰退期にあるのかといった「技術ライフサイクル」の判断材料を提供する¹⁶。また、特定の企業の出願急増を検知することで、競合の新製品開発の兆候を掴むことができる。
- **マトリクスマップ:** 縦軸と横軸に異なる属性（例：縦軸に出願人、横軸に技術分類）を設定し、バブルチャートやヒートマップとして表示する。これにより、各社がどの技術領域に注力しているか、あるいはどの領域が手薄か（ホワイトスペース）を一目で把握できる。いわゆる「競合比較分析」や「ポートフォリオ分析」の基本となるマップである¹⁵。
- **サイテーションマップ（引用分析）:** 特許間の引用・被引用関係をネットワーク図として描画する。多数の特許から引用されている「基本特許」や、技術がどの企業からどの企業へと流れているかといった技術波及の経路を可視化する¹。
- **シェアマップ:** 特定分野における各社のシェア構成を表示し、市場の占有状況を把握する¹⁶。

3.2 クロス集計とAPI連携による拡張性

プリセットチャートに加え、ユーザーが自由に軸を設定して集計を行える「クロス集計」機能も提供されている¹。ここでは、検索結果に含まれる任意のフィールド(例えば、FTermの特定コードと出願人の組み合わせなど)を掛け合わせて集計表を作成できる。

さらに、PatentfieldはAPI(Application Programming Interface)を提供しており、外部システムとの連携が可能である¹⁷。

- **BIツール連携:** 検索結果や集計データをAPI経由で取得し、TableauやPower BI、Google Data Portalといった汎用BIツールに取り込むことができる。これにより、特許データを売上データや市場データと統合したダッシュボードを作成し、経営会議でリアルタイムに共有するといった高度な活用が可能になる。
 - **社内ポータル連携:** 社内のインターネットや研究開発管理システムにPatentfieldの検索窓や簡易分析結果を埋め込むことで、日常業務の中で自然に特許情報に触れる環境を構築できる¹⁹
-

第4章: Patentfield AIR - 生成AIによる知財業務の変革と自動化

「Patentfield AIR」は、2025年以降の特許情報分析において最も革新的な追加機能である。これは、OpenAIのGPTシリーズやAnthropicのClaudeといった最先端の生成AI(LLM)をPatentfieldのプラットフォームに統合し、「検索」を超えた「生成・読解・評価」の自動化を実現するものである¹。

4.1 大規模特許文献の一括査読と要約の自動化

Patentfield AIRの特筆すべき能力は、最大1万件という極めて大規模な特許母集団に対して、一括で生成AI処理を実行できる点にある¹。

- **従来の課題:** 通常、無効資料調査やクリアランス調査では、検索で絞り込んだ数千件のリストを目視で確認(スクリーニング)する必要があった。1件あたり数分かかるとしても、数千件の処理には膨大な工数(数百時間)を要し、知財部員の大きな負担となっていた。
- **AIRによる解決:** AIRを利用すると、ユーザーはプロンプト(指示)を設定するだけで、リストアップされた数千件の特許公報すべてに対し、AIに指定した観点での「要約」や「評価」を行わせることができる。
- **カスタマイズ可能な抽出:** 単なる要約だけでなく、「この特許の請求項に、構成要件A(例:酸化チタンの被覆層)が含まれているか?」といった具体的な質問を投げかけ、AIに「あり/なし/不明」の判定とその根拠となる段落を抽出させることができる。この結果は一覧表(Excel等)として出力可能であり、人間はAIが「あり」または「グレー」と判定した文献のみを精読すればよいため、調査時間を最大65%短縮できるとされる²²。

4.2 明細書ドラフト作成支援(AIドラフト)

2025年10月にリリースされた「AIドラフト生成機能」は、発明の発掘から出願までのプロセスを一変さ

せる可能性を秘めている²。

- **機能概要:** 研究者やエンジニアが日常的に作成している「技術メモ」「発明提案書」「仕様書」などのテキストファイルをアップロードすると、AIがその内容を解析し、特許出願に必要な「特許明細書」のドラフト(たたき台)を自動生成する。
- **生成される項目:** 背景技術、発明が解決しようとする課題、課題を解決するための手段、発明の効果、発明の実施の形態といった、特許特有の構造化された文章が出力される。
- **戦略的価値:** この機能の最大の価値は、出願のハードルを下げるにある。多忙なエンジニアにとって明細書の執筆は大きな負担であるが、AIがたたき台を作ることで、エンジニアは技術的な本質の確認に集中できる。また、知財部員や弁理士にとっても、ゼロからヒアリングして執筆する手間が省け、より高度な権利範囲(クレーム)の設計や、拒絶理由通知への対策といった戦略業務に時間を割くことが可能になる²。

4.3 AIチャットによる対話型検索とサポート

Patentfield AIRには、対話型AI(チャットボット)インターフェースが組み込まれている²⁵。

- **対話型分析:** 「この技術分野の主要な課題は何か?」「競合A社の最近の特許戦略の特徴を教えて」といった自然言語の質問に対し、検索結果の特許データを参照しながら、AIが分析結果を回答する。これは、複雑な検索式や分析軸を考えることなく、直感的にインサイトを得る手段として、経営層やR&D部門にとって有用である。
- **操作サポート:** 直近のリニューアルにより、24時間365日のサポートチャットとしても機能するようになった²⁶。Patentfieldの機能や操作方法について質問すると、即座に回答が得られるため、マニュアルを読み込む手間が省ける。

4.4 グローバル対応(AIサマリーグローバル)

企業の活動がグローバル化する中で、外国特許の調査は必須となっているが、言語の壁が依然として大きな障害である。Patentfieldの「AIサマリーグローバル」機能は、この壁を生成AIによって破壊する²⁷。

- **AI翻訳と要約:** 英語、中国語、韓国語などの海外特許に対し、単なる機械翻訳(直訳)ではなく、生成AIが文脈を理解した上で、日本語の「要約」を作成する。さらに、その特許の特徴を表す「分類ラベル」も自動生成する。
- **日本語での海外特許検索:** 画期的なのは、生成された日本語要約がそのまま検索対象となる点である²⁷。これにより、ユーザーは日本語のキーワードで検索するだけで、英語や中国語の特許も(日本語の要約がヒットすることで)漏れなく発見できる。これは、外国語検索のスキルがない担当者でもグローバル調査が可能になることを意味する。

第5章:技術的優位性とAIの仕組み

Patentfieldが提供する高度な機能は、独自の特許技術と機械学習アルゴリズムに支えられている。

5.1 プロンプトエンジニアリング支援技術(特許第7542812号)

Patentfield株式会社は、生成AIを特許業務に適用するための基盤技術として、特許第7542812号を取得している²⁹。

- **技術内容:** これは、特許タスク(分類付与、製品対比、無効資料調査など)において、ユーザーが意図した結果をAIから引き出すための「プロンプト(指示命令)」の作成負担を低減する技術である。特許文書は構造が特殊であり、単にテキストを流し込むだけではAIが誤認する可能性がある。この特許技術は、明細書の一部(請求の範囲や図面の説明など)を適切に指定し、コンテキストを含めた最適なプロンプトを内部で生成・処理する仕組みを提供する。
- **ユーザーメリット:** ユーザーはプロンプトエンジニアリングの専門知識がなくても、PatentfieldのUI上で「要約作成」や「侵害判定」といったボタンを押すだけで、裏側で最適化されたプロンプトが走り、高精度な回答が得られる。この技術的裏付けが、業務ツールとしての信頼性を担保している。

5.2 AI分類予測と教師データによる学習(Active Learning)

AI分類予測機能の中核には、ユーザーの判断を学習する仕組みがある⁸。

- **教師あり学習:** ユーザーが「重要」「ノイズ」「分類A」といった判定を下した特許(教師データ)をシステムに登録すると、AIはその特徴(ベクトル空間上の位置関係やキーワードの出現パターン)を学習し、予測モデルを作成する。
- **高速予測とスコアリング:** 作成されたモデルは、未読の特許群(数万件)に対して瞬時に適用され、それぞれの特許がどの分類に属するか、あるいは重要度がどの程度か(AIスコア)を算出する¹。
- **柔軟な分類体系:** 「侵害/非侵害」のような2値分類だけでなく、「カソード/アノード/電解質」のような多値分類、あるいは1つの特許に複数のタグを付与するマルチラベル分類にも対応している⁴。
- **パラメータチューニング:** 予測の精度(Precision)を重視するか、網羅性(Recall)を重視するかといった閾値の設定や、各特徴量の重み付けをユーザー側で調整できる機能も備えており、企業の独自基準に合わせたAIモデルの育成(パーソナライズ)が可能である⁹。

第6章: 料金プランと導入モデル

Patentfieldの料金体系は、フリーランスから大企業まで対応できるよう段階的に設計されている。

6.1 プラン構成と機能制限

料金プラン別 機能・サービス比較

機能カテゴリー	Freeプラン (無料)	BASICプラン (個人事業主向け)	Corpプラン (法人向け)
検索可能回数	制限あり 月20回程度 (初月30回)	無制限	無制限
マップ・集計分析	基礎のみ 分析上限1,000件 集計機能なし	利用可能 分析上限50万件 クロス集計対応	フル機能 分析上限50万件 クロス集計・保存対応
AIセマンティック検索	利用可能	利用可能	利用可能
サポート体制	—	メール 5営業日以内	電話 & メール 2営業日以内 ボリューム割引あり

法人利用 (Corpプラン) では、全機能へのアクセスに加え、電話サポートやボリュームディスカウントが適用される。AIRなどの生成AI機能は別途オプション契約が必要となる場合がある。

Data sources: [Patentfield Pricing](#), [Yorozu IP](#), [Patentfield Support](#), [Patentfield](#)

- **Freeプラン:** 登録のみで利用できる無料プラン。検索機能の試用が可能だが、月間の検索回数(約20~30回)や分析母集団の上限(1,000件)、CSVダウンロード、集計機能などに厳しい制限がある⁴。あくまで機能確認や、学生・個人の学習用途向けである。
- **BASICプラン(個人事業主向け):** 月額10,000円(年払いの場合)。1ユーザーID限定で、アカウント共有は不可。検索回数は無制限となり、基本的な分析機能が開放される。弁理士やフリーランスの特許サーチャーに適している¹。
- 法人向けプラン (Mini / Corp):
 - **Mini:** 4ID以下の小規模チーム向け。料金はID数に応じて月額20,000円~29,800円程度とリーズナブルに設定されている⁴。
 - **Corp:** 5ID以上の大規模組織向け。ID単価が割安になるほか、電話サポート、API連携オプション、プライベートクラウド環境の構築などが選択可能になる¹。

6.2 オプション機能とコスト構造

基本プランに加え、特定の高度機能を利用するためにはオプション契約が必要となる場合がある。

- **Patentfield AIR:** 生成AI機能を利用するためのオプション。IDあたり月額30,000円~(推定)などの追加費用が発生する。大量のトークンを消費するLLM利用料が含まれるためである¹。
- **AIサマリーグローバル:** 海外特許の日本語要約・検索機能。Corpプランの基本料金の30%増

しなどで提供される²⁷。

- その他のオプション: 類似画像検索、SDI(検索条件の自動配信)の設定数増加、API利用などは別途見積もりベースでの提供となる¹。
-

第7章: 競合他社ツールとの比較とポジショニング

AI特許ツールの市場には、「Summaria(サマリア)」「Tokkyo.Ai」「AI Samurai」などの競合が存在するが、Patentfieldは「統合力」と「処理規模」で独自のポジションを築いている。

7.1 vs. Summaria / Tokkyo.Ai / AI Samurai

- **処理能力:** Patentfield AIRは「最大1万件」の一括処理能力を公称しており、大規模なランドスケープ分析やクリアランス調査において強みを持つ。他社ツールは、1件ごとの詳細な評価や、特定の発明に対するクレーム生成に特化している場合が多く、大量処理においてはPatentfieldに分がある²¹。
 - **機能特化 vs 総合力:** AI SamuraiやTokkyo.Aiは、発明評価や類似検索に特化した機能を持つ傾向がある。一方、Patentfieldはプロフェッショナル検索、パテントマップ、AI予測、生成AIのすべてを高いレベルで統合しており、IPランドスケープ業務全体を1つのツールで完結できる点が強みである¹¹。
 - **連携のエコシステム:** 興味深い点として、Patentfieldは競合ともなりうる「Summaria」との機能連携も進めている。例えば、Summariaで生成した高精度な要約データをPatentfieldに取り込み、Patentfieldのマップ機能で分析するといった連携が可能である³³。これにより、ユーザーは各ツールの「いいとこ取り」が可能になっている。
-

第8章: 戦略的活用シナリオ(ユースケース)

最後に、Patentfieldの機能を組み合わせることで、具体的にどのような業務変革が可能になるか、3つのシナリオで解説する。

8.1 侵害予防調査(クリアランス)の圧倒的効率化

新製品をリリースする前には、他社の特許権を侵害していないかを確認するクリアランス調査が必須である。

- **従来:** キーワード検索で数千件をヒットさせ、Excelに出力し、数週間かけて全件を目視確認していた。
- **Patentfield活用フロー:**
 1. **AIセマンティック検索:** 製品の仕様書を読み込ませ、キーワード漏れのない母集団を作成する。
 2. **AI分類予測:** 過去の調査結果(教師データ)を利用し、明らかに「無関係」な特許(ノイズ)をAIに判定させ、スコアの低い特許を足切りする。
 3. **Patentfield AIR:** 残った重要候補特許(数百件～数千件)に対し、AIRで「本製品の構成要

- 件X(例:特定の回路構造)が含まれているか?」を一括判定させる。
4. 人間による判断: AIが「侵害の疑いあり(High Risk)」と判定した数十件のみを弁理士や知財担当者が精査する。
 - 成果: 調査工数を劇的に削減し、製品リリースのリードタイムを短縮する⁶。

8.2 IPランドスケープによる経営戦略支援

経営層から「次の成長領域はどこか?」と問われた際の分析業務。

- **Patentfield活用フロー:**
 1. 市場トレンド検索: セマンティック検索で「脱炭素」「生成AI」などの広範なテーマに関連する特許を収集。
 2. パテントマップ(マトリクス): 縦軸に「課題」、横軸に「解決手段」を設定したマトリクスマップを作成。他社が密集している「激戦区」と、出願が少ない「ホワイトスペース(空白地帯)」を可視化する¹⁵。
 3. AIRによるトレンド要約: AIRのチャット機能で「ホワイトスペースにある特許の共通点は何か?」「なぜこの領域は出願が少ないのか(技術的困難性か、市場性がないのか)」を問い合わせ、定性的なインサイトを得る。
 4. レポート作成: マップとAIの分析コメントを統合し、経営層向けの提言レポートを作成する。
 - 成果: データに基づいた客観的な事業戦略立案が可能になる。

8.3 R&D部門の発明発掘と出願促進

エンジニアがアイデアを持っていても、特許出願の手間を嫌って埋没してしまうケース。

- **Patentfield活用フロー:**
 1. 簡易調査: エンジニアがスマホやPCからアイデアメモをPatentfieldに入力し、類似特許がないか自己検索する(セマンティック検索)。
 2. AIドラフト: 新規性がありそうなら、そのメモを「AIドラフト機能」に投入し、明細書のたたき台を自動生成させる²。
 3. 知財部連携: 生成されたドラフトを知財部に送付。知財部は形式が整った状態からスタートできるため、スムーズに出願手続きへ移行できる。
 - 成果: 社内の発明発掘数が増加し、強力な特許ポートフォリオの構築につながる。

結論

Patentfieldは、AI技術を「検索の補助」という位置付けから、「分析・生成・意思決定の主体」へと昇華させたプラットフォームである。特にPatentfield AIRの登場により、特許情報は「探すもの」から「対話するもの」「生成するもの」へと変貌を遂げた。

大量のデータを扱う大企業においては、その高速処理能力とAPI連携による拡張性が強力な武器となる。一方で、リソースが限られる中小企業や個人事務所にとって、AIが優秀なアシスタントとして機能し、高度な分析や明細書作成を支援する頼れるパートナーとなるだろう。

今後の展望としては、AIエージェント機能のさらなる自律化(ユーザーが指示しなくても、定期的に競合を監視しアラートを出すなど)や、社内文書(非特許情報)との統合検索機能の強化が期待される。Patentfieldは、日本の知財DX(デジタルトランスフォーメーション)を牽引し、企業の競争力を高めるための重要なインフラとしての地位を確立しつつある。

引用文献

1. Patentfield | AI特許検索・特許分析・特許調査データベース, 1月 18, 2026にアクセス、<https://patentfield.com/>
2. 発明メモをAIが特許明細書に。リーガルテック社、『AIドラフト生成 ..., 1月 18, 2026にアクセス、<https://oprodct.ai/articles/3971208>
3. サービス内容 - Patentfieldヘルプセンター, 1月 18, 2026にアクセス、<https://support.patentfield.com/portal/ja/kb/articles/%E3%82%B5%E3%83%BC%E3%83%93%E3%82%B9%E5%86%85%E5%AE%B9>
4. 料金プラン | Patentfield, 1月 18, 2026にアクセス、<https://patentfield.com/pricing>
5. PatentField - 特許分析に必要な情報が1画面で全て揃う | Patent-Lab, 1月 18, 2026にアクセス、<https://patent-lab.jp/patentfield/>
6. AI特許検索・分析プラットフォーム Patentfield(パテント ..., 1月 18, 2026にアクセス、<https://evort.jp/presentations/patentfield/platform>
7. Google ColabでPatentfieldAPIを使用したAIセマンティック検索 - note, 1月 18, 2026にアクセス、https://note.com/super_whale150/n/n83e3a8c2b87b
8. AIを活用した特許検索の現状, 1月 18, 2026にアクセス、<https://pcip.jp/wp-content/uploads/2024/04/file-5.pdf>
9. ナレッジベース - Patentfieldヘルプセンター, 1月 18, 2026にアクセス、<https://support.patentfield.com/portal/ja/kb/patentfield>
10. API連携 - Patentfieldヘルプセンター, 1月 18, 2026にアクセス、<https://support.patentfield.com/portal/ja/kb/articles/api%E9%80%A3%E6%90%BA>
11. Patentfield 株式会社 - 日本特許情報機構, 1月 18, 2026にアクセス、https://japio.or.jp/00yearbook/files/2025introduction/01_21.pdf
12. 機械学習を用いた効率的な特許調査方法, 1月 18, 2026にアクセス、https://japio.or.jp/00yearbook/files/2023book/23_4_02.pdf
13. AIセマンティック検索, 1月 18, 2026にアクセス、<https://support.patentfield.com/portal/ja/kb/articles/ai%E3%82%BB%E3%83%9E%E3%83%B3%E3%83%86%E3%82%A3%E3%83%83%E3%82%AF%E6%A4%9C%E7%B4%A2>
14. 3つの新機能「新UI」「PFレポート」「類似画像検索」をリリースし ..., 1月 18, 2026にアクセス、<https://patentfield.com/news/236>
15. パテントマップ | 弁理士法人M&Partners, 1月 18, 2026にアクセス、<https://mpip.jp/jp/service/patentmap>
16. 食品開発のための特許情報分析と特許マップ活用策について, 1月 18, 2026にアクセス、<http://nakatani-peoffice.com/wp-content/uploads/2019/03/bfd91d54ea38f5df7130ba49c030226d.pdf>
17. Google ColabでPatentfieldAPIを使用したトレンド分析 - note, 1月 18, 2026にアクセス、https://note.com/super_whale150/n/n592c58c6c2d4

18. Patentfield_API連携オプション_サービス紹介PV - YouTube, 1月 18, 2026にアクセス、
<https://www.youtube.com/watch?v=qyj5Q8Jnw3M>
19. 「Patentfield」API連携サービスの提供を開始 - PR TIMES, 1月 18, 2026にアクセス、
<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000036.000025380.html>
20. ウェビナー『基本機能レクチャー&生成AI機能Patentfield AIRの実演 ... , 1月 18, 2026にアクセス、<https://patentfield.com/news/290>
21. 生成 AI が触媒する戦略的進化: Patentfield の市場ポジショニングと ..., 1月 18, 2026にアクセス、
<https://yoroziupsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/fd4c0cc3106aef140a5f.pdf>
22. Patentfield AIR 生成AI調査・分析オプション, 1月 18, 2026にアクセス、
<https://support.patentfield.com/portal/ja/kb/articles/patentfield-air-%E7%94%9F%E6%88%90ai%E8%AA%BF%E6%9F%BB-%E5%88%86%E6%9E%90%E3%82%AA%E3%83%97%E3%82%B7%E3%83%A7%E3%83%B3>
23. 発明メモから特許出願までを高速化する『AIドラフト生成機能』を ..., 1月 18, 2026にアクセス、<https://www.legaltech.co.jp/notice/draft/>
24. AI 搭載の特許明細書作成ソフトウェア - Questel, 1月 18, 2026にアクセス、
<https://www.questel.com/ja/patent-drafting-software-with-ai/>
25. 生成AI特許検索・調査・分析・査読 | Patentfield AIR - evort エボルト, 1月 18, 2026にアクセス、<https://evort.jp/presentations/patentfield/patentfield-air>
26. アップデートのお知らせ_問合せ用チャット機能の ... - Patentfield, 1月 18, 2026にアクセス、<https://patentfield.com/news/291>
27. Patentfieldが新機能「AIサマリーグローバル」を発表、特許の見える ..., 1月 18, 2026にアクセス、<https://voix.jp/business-cards/patentfield-ai-summary-global-launch/>
28. [Patentfield]生成AIで8000万件の特許を「見える化 ... - PR TIMES, 1月 18, 2026にアクセス、<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000059.000025380.html>
29. Patentfield株式会社に対する生成AIに関する特許権侵害訴訟の追訴 ..., 1月 18, 2026にアクセス、<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000009.000086119.html>
30. 知財実務における生成AI利活用の特許3件取得 - PR TIMES, 1月 18, 2026にアクセス、
<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000007.000086119.html>
31. FREEプラン - Patentfieldヘルプセンター, 1月 18, 2026にアクセス、
<https://support.patentfield.com/portal/ja/kb/articles/%E3%83%95%E3%83%AA%E3%83%BC%E3%83%97%E3%83%A9%E3%83%B3>
32. 個人事業主向けBASICプランの年間契約割引キャンペーンを開始, 1月 18, 2026にアクセス、<https://patentfield.com/news/277>
33. 生成 AI 活用特許分析ツールの比較分析 :, 1月 18, 2026にアクセス、
<https://yoroziupsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/34eff7c02387c7ab46b1.pdf>
34. AIサマリー概要 - Patentfieldヘルプセンター, 1月 18, 2026にアクセス、
<https://support.patentfield.com/portal/ja/kb/articles/ai%E3%82%B5%E3%83%9E%E3%83%AA%E3%83%BC%E6%A6%82%E8%A6%81>
35. 特許情報分析ツールの多面的な機能と用途, 1月 18, 2026にアクセス、
<https://yoroziupsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/f8d49cefae2601ab1622.pdf>